

また、品種によっては草丈に長短があり、跡作につくるには、短期間に生育して稈が固くなり残留有機(乾物重)の多い品種が良いと思います。7月25日(40日目)の生育調査は表1の通りです。

表-1 生 育 調 査

区 別	1	2	3	4	5	6	7	8
品 種 名	バイオニア A	ウイスコン シン 85	〃 95	〃 110	〃 115	白 デント	黄 デント	スノー デント
	209.4	204.3	202.7	200.4	207.8	226.7	206.0	204.5

7/25日調査、草丈cm, 20株平均

有機物の土壌施用(トウモロコシの鋤込み)は、約60日目の8月13日に、トウモロコシの立ったまま、耕耘機で押し倒しながらロータリー耕耘をしましたが、かなり耕耘機のロータリーに巻き付き、初めは鋤込みが出来ないのではないかと心配しましたが、どうにか全部耕耘することが出来ました。1ヶ所を3回くらい通ってもなかなか切れず、1米くらいの長さのままでした。キビガラが10cmくらいの厚さに広がり、下の地面は見えないほどでした。

8月末に2回目の耕耘を、苦土石灰と一緒にに行いました。その時点でのキビガラは、下の方はすでに腐っており、茎も短かく切れて土と良く混和しており、キビガラの甘い匂いがして、肥料として何となく効果があるように思いました。

土壌調査は播種前(6月16日)のECが0.8で、刈取後(8月9日)は0.2と、かなり低くなっており、雨で流亡した結果やデントコーンの除塩効果によるものと思

いますが、私には専門的なことは良くわかりません。

次の鋤込みは、9月10日に予定の元肥とともに耕耘しましたが、キビガラは作業に全く支障がなく、完全に土と良く混じり合って、畦立も植付けも楽に出来ました。

ピーマンは10月5日に定植しましたが、成育は順調

で、今まで通りの栽培圃と比較しても、節間も短かく、収量も多いようでした。畦の中の土の状態も団粒化し、大きな根が畦の側に出てくるほどで、生育は極めて良好です。

灌水によって畦の表面が固くなったり、乾燥したりするのを防ぐため、シキワラをしますが、そのままでは、よくワラの中の根が萌芽して、まるで畦の土に草が生えたようになるので、ビニールを張って土壌消毒を行う際、ワラをハウスの中で一緒に消毒して萌芽を止めまし

表-2 収 量 調 査 生重kg/坪

区 別	1	2	3	4	5	6	7	8	
品 種 名	バイオニア A	ウイスコン シン85	〃 95	〃 110	〃 115	白 デント	黄 デント	スノー デント	
南	17.1	14.4	11.2	12.8	10.5	9.7	12.0	11.2kg	
北	15.9	14.1	14.9	18.0	14.9	11.0	12.2	12.4	
平 均	16.5	14.3	13.1	15.4	12.7	10.4	12.1	11.8	13.3
乾物 kg/坪	6.80	4.10	4.45	7.40	4.00	3.75	3.10	4.60	4.78
乾物 %	42.8	29.1	29.9	41.1	26.9	34.1	25.4	37.1	33.3

すなわち、4t/10aの生重で、1.2t/10aの乾物となった。

た。薬剤はソメプロを使いました。

デントコーンの乾物重量は表-2の通りです。

これからの私達園芸農家にとっては、地力維持増進のための有機資材を、いかに有効に活用して生産物の増収をはかるかを、大いに考えるべきだと思います。

飼料作物は前年を上回る？

飼料作物のうち、青刈えん麦、青刈らい麦、家畜用ビートは集約的で省力化が困難なこと、れんげは単位面積当り収量が低水準であること等から、年々減少を続けており、52年度も引続きそれぞれ3.2%、1.7%、9.1%、17.6%減少したが、全体の約8割を占める牧草は、機械化の適応性が強いこともあって、引続き2.6%増加、青刈とうもろこし、ソルゴーもそれぞれ前年比6.8%、10.4%増加した。

全国の作付面積の6割強を占める北海道は、青刈えん麦、家畜用ビートは減少したが、ウェイトの高い牧草が草地の造成等で、42~52年の間に約2倍増加し、比較的飼料頭数に見合った生産を確保しており、52年産も前年比で2.6%増加したのをはじめ、青刈とうもろこしが10%増、飼料用かぶも24.4%増加したため、全体では3.1%増加した。このため、北海道では粗飼料給与率が高

い。これに対し都府県は牧草の2.6%増、青刈とうもろこしの4.1%増、ソルゴーの10.4%増があったものの、青刈えん麦の1.4%減、飼料用かぶの2.4%減、れんげの17.6%減があって北海道の伸びの水準に達せず、全体では2.0%増にとどまった。

52年産の収穫量は、全般的に初期生育は低温と降雨不足で抑制されたが、7月上旬以降適雨と好天候によって「やや良」となり、6種類(牧草、青刈とうもろこし、ソルゴー、青刈えん麦、家畜用ビート、飼料用かぶ)計では3,468万トンで前年産に比べ10.3%増加した。

53年産の飼料生産については、作付面積は乳用牛を中心として飼養頭数の増加、更に水田利用再編対策の実施による飼料作物の転換が見込まれるなどから、北海道の伸びを中心に、都府県でも引続き増加するとみられ、全体でも作付面積はやや増加すると見通される。収穫量も天候が平年並みに推移すれば、前年産をやや上回ると見込まれる。(こしの農業観測から)